

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	8月30日 機上の日記 〈紀行〉
Author(s)	手島, 稔之
Citation	広大言語 , 8 : 70 - 73
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046304
Right	
Relation	



サンドロス大王の旧都ペラの遺跡、帰りの汽車の窓から見たオリンポス山の威容など、印象に残るものはまだ数々あります。また本稿ではギリシアの二大都市での思い出ばかりを綴りましたが、アテネから日帰りで訪ねた幾つかの古蹟めぐり、エーゲ海の船旅、ペロポネソス南西部の一人旅の話などもあります。しかし紙数も予定を超えましたので一まずこれで打ち切り、またの機会に記したいと思います。

ギリシアの人たちは親切であった、*euxenos*（客もてなしのよい）と言われた古代ギリシア人の伝統は今日のギリシア人にも依然受けつがれている、と言う感じが強くしたのです。なお西欧の人たちはどうか、前号で西欧の人はどこか冷いところがあるとの或る人の感想をちょっと紹介しましたが、私のわずかばかりの体験では、西欧でも不愉快なめにはほとんど逢わなかったと言えます。しかし人なつっこさと言った点ではやはりギリシアが第一、ついでドイツだったでしょうか。心配したイギリスも存外悪くありませんでした。

——だがすべてきわめて短期間のささやかな体験からの管見にすぎません。

8月30日 機上の日記

手 島 稔 之

黄褐色のフィールドの上を、日の丸の首翼を振わせながら私たちの飛行機は飛び立った。

これでアメリカ本土とお別れた。私たちの前方には太平洋の海が果しくなく広がっている。真下には白いサンフランシスコの街々が見え、ゴールデンゲイトが、そこがどこであるかを私たちに知らせてくれる。今日、数時間のうちにはハワイのホノルルへ、ホノルルからさらに東京まで数時間。飛行機は高度9,500メートル、時速900Km/hで飛ぶJALのDC-8である。今、午前10時55分、しかしハワイの時間は午前8時前5分である。隣の席に座り合わせた大阪YのTさんが私に尋ねるにはこの研修旅行で特に何を得たか？というのである。しかし、思い出して、特にこれというものは無い。むしろ言い換えれば何もかも……何もかも私たちの経験したもの、それが私たちによって得られるものとなり得るのだから。

デンバーを27日に発ったあとコロラド州からユタ州、ネヴァダ州を経てカリフォルニア州へ出て来る。平坦な平原から、いくつもの丘々を越え広い高速道路を上下しながら最後の高い丘を登りつめると速くに白く光って海が広がる。遙るか遠くにサンフランシスコの街が見える。この瞬間もひとつの感激である。ついにサンフランシスコに着いた。サンフランシスコは私たちの旅程では最

後の地点である。それだけ、よけいにサンフランシスコへの到着は感慨深い。岸には太平洋の荒波が思い切り打ち寄せている。バスの進行方向眼前にはベイブリッジが、さらにシスコ島の向う側にはゴールデンゲイトブリッジが私たちが待っている。市を中心にして薄く霧が立ちこめている。街の高層ビル群も影と光の素晴らしい油絵として眼に写る。いよいよベイブリッジを越えてサンフランシスコへ入る。マーケットストリートを横切ってトルコストリートをぬきY M C A ホテルへと落ち着く。Y M C A ホテルでは335号室、個室が与えられた。長い33時間のバス旅行の汗を流して、ドレスアップして下町へとくり出した。早速パウエル街を通る。ケーブルカーに乗って丘を高く高く登っていった。とある所では只乗りのケーブルカーを降りて右折して下るとその通りと交叉して、賑やかなチャイナタウンがあるではないか。5ブロックから6ブロック歩いて、或る中華料理店に入って焼飯と豆腐入りのスープを食べた。それからノースビーチへ行って街々を歩き回った。帰途道に迷い、バスに乗ったり、人々に尋ね尋ねホテルに戻った。

29日の朝から皆でバスで市内観光、最初に見てまわったところは、シスコで一番高いトッインピークス（双子岳）をはじめとしてゴールデンゲイトブリッジや市立公園、海洋博物館、植物園等を見、最後にフィッシャーマンズウォーフ（漁夫の波止場）へ行って解散、昼食後、マーケットストリート等を見て歩き、4時に約束した会社の取引先きの社長ジャクソン氏に面会、挨拶のあと、デパートで買物をしてかなりの時を費やした。夜は、霧の都サンフランシスコでバッドワイザーなどを飲みながらゆっくりくつろいだ。

29日の夕方、ホテルへ戻って、帰りの荷物の整理をしていると、どうも洗濯物がたまっているようなので、ついに意を決して洗濯することにした。しかし、まず、どこに洗濯機があるかわからないのでフロントへ電話して尋ねると、ホテルの中には洗濯機が無く、ホテルのすぐ近くに洗濯機を貸すランドリーがあるということである。洗濯物をひとまとめにして小さなナイロン製のバッグに詰め、通りへ出て洗濯屋を捜した。LAUNDRY, CLEANING, WASHINGなる文字を必死になってさがした。10分以上もうろついてホテルの真ん前に目的の洗濯屋があるのを見つけた。けれども、そこはちょうど店じまいするところだった。幸に、その人が1ブロック裏側にある貸洗濯機屋を教えてくれた。さて洗濯機の前に立って洗剤を持って来なかったのに気づいた。近くの、角の雑貨屋へ行って一番小さな箱入りの洗剤を買って、一回25セントの洗濯機を使って洗いはじめた。のどがかわいていたので、また角の雑貨屋へ行って16セントのかん入りのコークを買って、洗濯機が洗い終わのを待ち待ち飲んでいた。となりの酒場からウエスタンソングが壁越しに聴えてくる。やがて洗濯機が洗い終えて止まった。次に洗濯物を乾燥機に入れて20セントで20分間乾わかった。この夕方の一時間、私の実感したことは、こういうふうにして生々しく

現実の生活の場で使うと外国語も本物になるなということである。

シスコの街の感じは、ニューヨークに比較すると、すっかりしていて美しい。丘の高い所から街が見おろせその街のビルの向うに海が見え景色に変化がある。道行く人々も都会的でしゃれっぽく、色彩がきれいで、実に見る眼を楽しませる。若い女性の多くがカラフルなミニウェアを身につけているのが街角では特に視線を奪う。デパートで買物を済ませたあと、そのデパートの前にあるスーパーマーケットで軽い夕食を済ませた。このスーパーマーケットの横が、ケーブルカーのタームするところである。ケーブルカーを待つ人々で、小さな人だかりが出来ている。人々の往來はかなり賑わしい。このケーブルカーの走る通りをへだてて向い側には帝国銀行のビルがそびえ立っている。シスコの街のあちこちで見られるようにヒッピースタイルの人々がうろついている。このマーケットと銀行の前には愛と平和を人々に呼びかけ、アメリカの現状はこれでよいのかという主旨の彼等の宣伝行動を行っている。

シスコに入ると急にヒッピースタイルが特に目立つ。まず女は髪の毛を長くする。ネグリジェ風の服やジブシー風の服を着る。

男はさかんに髭をはやし、裸に近い恰好やインディアン風の織物のチョッキのような上衣を身につけたりしている。

アメリカの持つ重大な悩み、人種のルツボであるが故に起る様々な問題、この解決は、一体どこにあるのだろうかと考えるときに、ヒッピーの言う、花を愛そう、人を愛そうという強い愛と平和への希望をふと考えてみるのである。あのニューヨークのセントラルパークの側をバスに乗って通った時、一外人観光客として、カメラを窓外に向けて構えた時に、そのレンズの中に写った修道女と先生に連れられた、数人の黒人の子供を含めた10数人の子供達の一群を見た瞬間、彼らの手と手をつないだシルエットがあまりに美しいために急に涙腺が刺戟されるのを覚えたことを忘れない。

ルイビルで私たち10数名が或る御家庭の夕食会に招待された。私たちは約束の時間より少し遅れて来たスクールバスに乗り込んだ。運転手は50才程の黒人で頭には野球帽のような帽子をかぶっている。運転手の横には運転手の息子、少年がひとりステップの上に腰を下ろしている。私は声をかけて、こちらに坐りなさいとすすめた。少年は一番前のシートに坐って私たちの次々に発する質問に輝やく眼と大人しい笑顔を以て低い音調の声で答えてくれた。やがて私たちの目的地に着いたようだ。場所はルイビル市の郊外で、ジェファソンカウンティ一だ。その少年の姉が玄関に姿を見せた。私たちがスクールバスから降りて、家の玄関のステップを上ると少年のお母さんが私たちを迎え入れて来れた。そのうち、ひとりふたりと次々に知り合いの人々がやって来て、私たちを入れて、30人以上の人々が賑やかにしゃべり、ハンガーを食べ、ある者はピアノをひき、歌をう

たい、楽しい時を過した。私たちの方は、黒人だからどうという奇異感はないのだし、ましてや差別待遇など不合理だと思うのだが、黒人にとっては黒人であるということは、アメリカの社会では大変なことなのだ。彼等はいつも一歩、白人に先をゆずっている。

白人が主で自分たちは従だという態度が身についてしまっている。この一歩という広い開きを完全にゼロにするまでにどんなに多くの努力がなされどんなに多くの時間がかけられるかとても想像出来ない。

「ベルトを締めよ」の機内サインが出た。もうすぐホノルルだ。ホノルルを出れば、私たちには明日が待っている。

1968年10月10日

消 息

☆ ドイツのキール大学へ留学の谷口幸男先生は9月30日帰国された。

☆ 切明慧先生（ロシア語）は8月中、ソビエットへ研修旅行された。

☆ 手島裕之氏（14回卒）は7月11日～8月31日の間、Y M C Aのアメリカセミナーに参加、合衆国各地を訪問。

☆ 次の諸氏が結婚された。

12回卒、砂川治子さん（42年11月。渡山と改姓）、15回卒、折出朋子さん（43年1月、横田と改姓）、12回卒、倉本健二氏（2月）、13回卒、大庭拓郎氏（4月）、13回卒、太森信子さん（10月、寒川と改姓）、15回卒、小野正恵さん（10月、長江と改姓）、10回卒、岡崎忠弘氏（11月）。御多幸を祈る。

☆ 其他の新就職、転勤、転居等については、住所録を見られたい。

卒 業 生 便 り

☆ 永い間、ご心配をかけ、この三月大学中退という仕儀になりまして面目なく思っております。どうしても、小説の道で、頑張ってみる所存で張り切っております。拙作「旋風」は、文学修業における、例えれば卒論のつもりで書いております。御笑覧下さい。（Y.M.）